

Vitality

首都大学東京

Team ざきちゃん家

大崎 拓海 ・ 水谷 春樹 ・ 宮本 ひかる

0. 要約

本研究は

学生時代の経験と時間展望が、
バイタリティーに与える影響を検討した

X1：学生時代の経験

X2：時間展望

Y：バイタリティー

0. 要約

具体的には

- 学生時代の経験がバイタリティーの各因子に与える影響を見る
- 個人の時間展望がバイタリティーの各因子に与える影響を見る
- 学生時代の経験と個人の時間展望を掛け合わせるとバイタリティーに与える影響はどうか？

目次

1. 導入
2. バイタリティーとは
3. 先行研究
4. 時間展望とは
5. 研究枠組み
6. 仮説の導出
7. 調査方法
8. 分析
9. インプリケーション
10. 参考文献

1. 導入

少年期

大学生

社会人

リタイア

幼少期

青年期

大学生は人生の夏休み

社会人への準備期間

でもありませんよね？

1. 導入

人生の夏休みだからこそ



まとまった時間で様々な経験ができる



その経験からなにか社会で必要なことを
身につけられないか

1. 導入

その経験からなにか社会で必要なことを
身につけられないか！



それが

バイタリティー

2. バイタリティーとは

学問としてのバイタリティー：6つの下位概念



◀ バイタリティー

「主体的にエネルギーに人生を生き抜く力」

福井ら(2015)

2. バイタリティーとは

福井ら(2015)を使用

活動性

様々なことにチャレンジしたい

粘り強さ

何回失敗しても成功するまであきらめない

前向きさ

たいていのことはなんとかなる気がする

柔軟性

変化に対して機敏に対応できる

閉籠り(逆転)

困難な事態に遭遇したら自分1人で抱え込む

元気さ

生き生きとし、活力に満ちている

2. バイタリティーとは →なぜ求められるのか

これから
必要な
人材像

国

社会人基礎力 / 若年者就職基礎力

経済産業省
厚生労働省

主体性・柔軟性

社会

困難から逃げずにそれに向き合い乗り越える力
(耐力・胆力)

経済同友会
(2015)

粘り強さ

企業

「ストレスコントロール力」

天川(2015)

バイタリティー

2. バイタリティーとは

なぜバイタリティーが求められるのか

企業が求める人材や資質 = 主体性 ≡ バイタリティー

バイタリティーの中でも特に

柔軟性・粘り強さに注目。

3. 先行研究

松尾(2005)
松尾(2013)
でも使用

① 経験学習モデル

「経験を変換することで知識を創り出すプロセス」

Kolb(1984)

“**経験**”

「客観的に判断できる事象(イベント)」

“**教訓**”

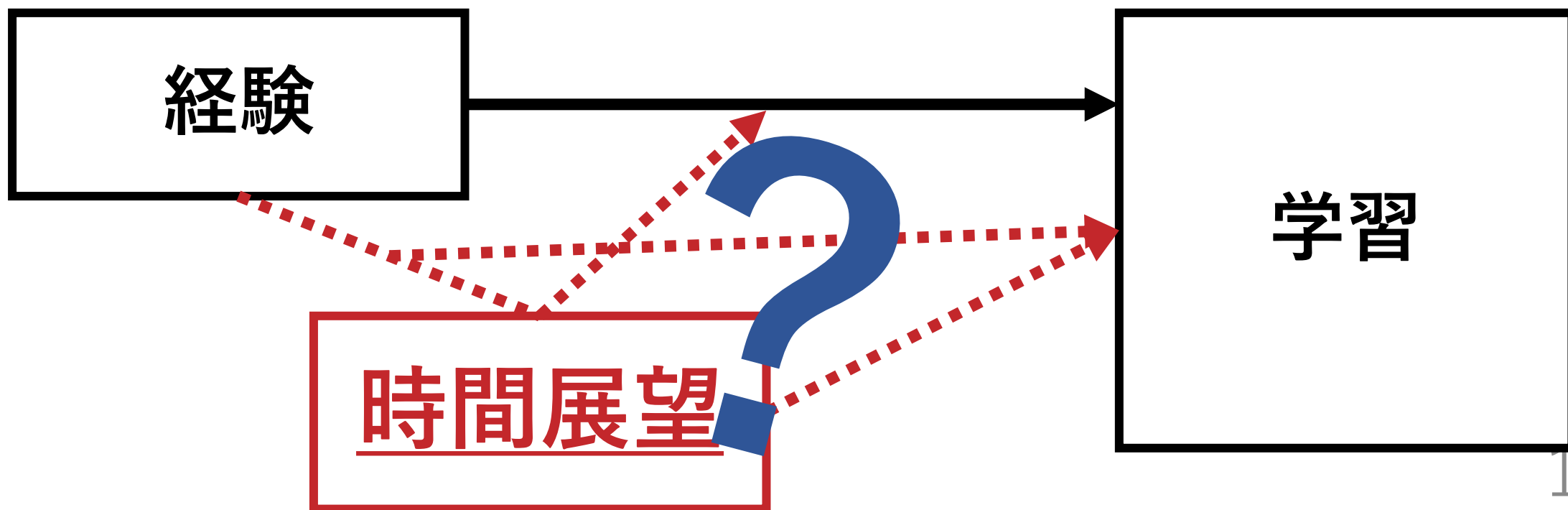
「獲得された知識・スキル(レッスン)」

McCall(1988)

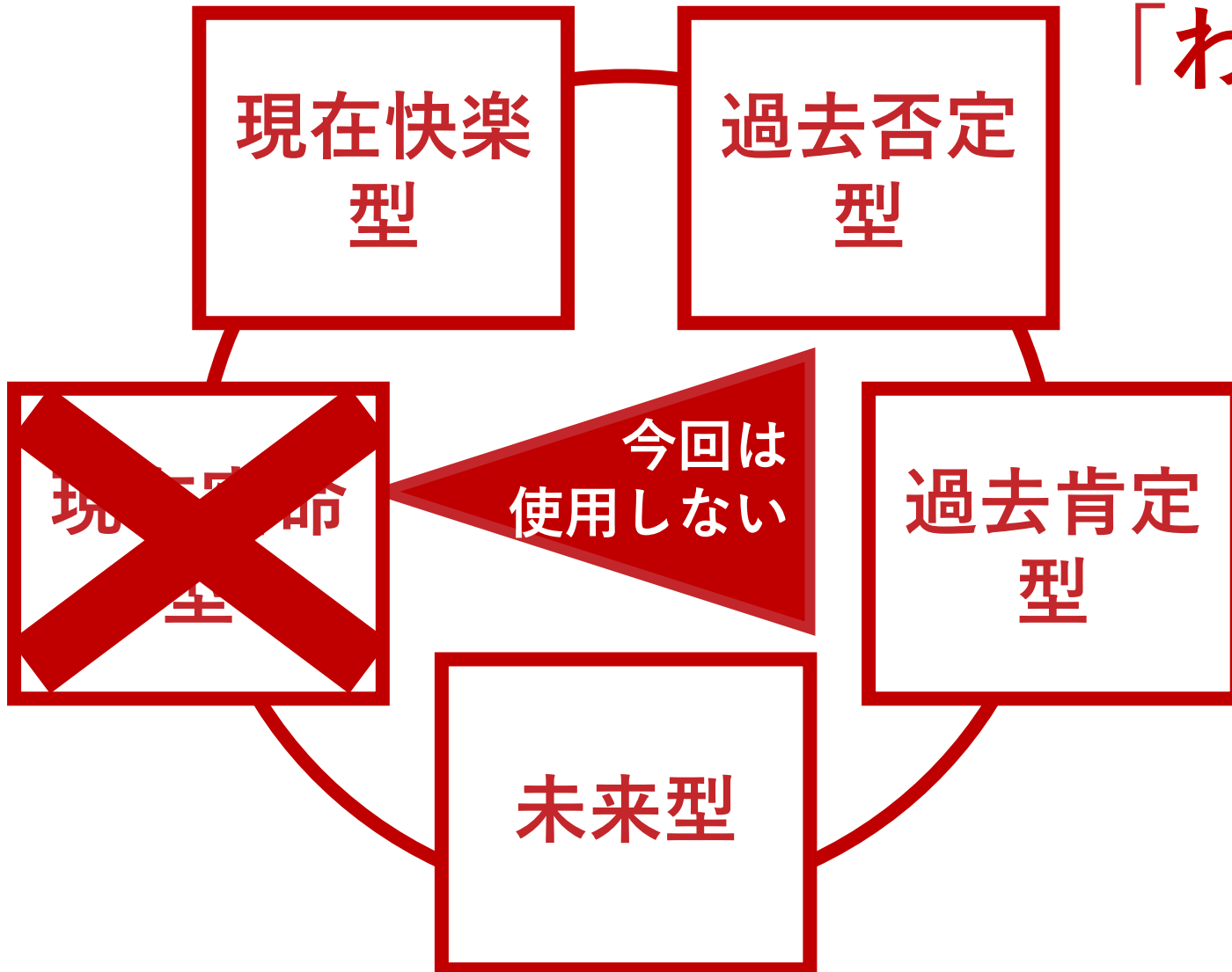
3. 先行研究

②時間展望

「経験からの学習は、過去から学び、その教訓を将来の行動に活かすという時間展望が関連している。」 金井・尾形(2008)



4. 時間展望とは



「わたしたちの
時間認識のありかた」

高橋(2016)

現在宿命型は、海外論文を日本に持ち込んだ高橋(2016)では、尺度としての確かさが十分ではなかった。

4. 時間展望とは

高橋(2016)

現在快楽型

- 今の快楽を追求し、危険を冒す向こう見ずな態度。
- リスクが高い行動をとりがち

過去肯定型

- 過去を肯定的に捉え昔を懐かしむ。
- かつての人間関係を大切にする。
- 自尊感情と幸福度が高い

未来型

- 現在の楽しみを犠牲に将来の目標のために努力する。

過去否定型

- 過去を否定的、回避的に捉える。
- 自尊心が低く、不安・不幸感が強い。
- 現状維持第一。

5. 研究枠組み

X1：学生時代の経験

1. リーダー
2. 立ち上げ
3. 海外経験
4. 挫折
5. 感化

X2：時間展望

1. 過去否定型
2. 過去肯定型
3. 現在快樂型
4. 未来型

H1

H3

H2

Y：バイタリティー

1. 柔軟性
2. 粘り強さ

5. 研究枠組み

研究の流れ

X1 :
学生時代の経験

X2 : 時間展望

H1

H3

H2

Y :
バイタリティー

H1. 学生時代の経験がバイタリティーの各因子に与える影響を見る

H2. 個人の時間展望がバイタリティーの各因子に与える影響を見る

H3. 学生時代の経験と個人の時間展望を掛け合わせるとバイタリティーに与える影響はどうか？

6. 仮説の導出

仮説 1

H1-1：大学時代のリーダー経験が、
柔軟性に正の影響を与える。

池田・古川 (2005)によると、リーダーの自信は管理職経験年数が増すにつれ高まり、リーダーが自信を保持することは、自らの行動に柔軟性を備えさせていると示されている。
→ リーダーを経験し自信が高まることで、柔軟性を高めると考えられる。

6. 仮説の導出

仮説 1

**H1-2：大学時代の海外生活経験が、
柔軟性に正の影響を与える。**

海外研修では、異文化の中で生活を余儀なくされる過程において、アイデンティティの再考やコミュニケーションギャップ、言葉の壁などに遭遇することが予想される。海外研修は、学生にそれらの問題をどのように解決するかという継続的思考を促す機会となり得る。(小林ら, 2013)

→ 問題に取り組むことが柔軟性を高めると予想できる。

6. 仮説の導出

仮説 2

**H2-1：過去否定型は、
柔軟性に負の影響を与える。**

過度に保守的で変化や新しい経験にオープンではなく現状維持を第一に考えるため。(高橋, 2016)

**H2-2：未来型は、
粘り強さに正の影響を与える。**

現在の楽しみを犠牲にして、将来の目標のために努力する態度を表すため。(高橋, 2016)

6. 仮説の導出

仮説 3

H3-1：過去否定型が大学時代に海外経験をすると、柔軟性に正の影響を与える。

過去否定型は過度に保守的で、変化や新しい経験にオープンではなく、現状維持を第一に考える傾向がある(高橋, 2016)。

→過去否定型は、本来、自ら物事を変えようとしなないタイプだが、海外に住むこと、つまり環境が変わることによって新たな物事に適応する必要が出てくるため、柔軟性を高めると予想できる。

7. 調査方法

対象	大学生・大学院生
調査方法	Google formを利用したWEB回答
調査期間	平成29年10月14日～21日
規模	有効サンプル数176(男92/女84)

7. 調査方法 調査票で尋ねたこと

コントロール変数

- 性別
- 学年
- 学部

独立変数(X)

- 大学生の経験
 - 時間展望
- 高橋(2016)より作成

従属変数(Y)

- **バイタリティー**
福井ら(2015)より作成

8. 分析 因子分析とは？

様々なものをグルーピングする分析



8. 分析 バイタリティーの因子 プロマックス回転

質問項目	因子				
	適応性	元気さ	粘り強さ	前向きさ	平静さ
あらゆる状況に臨機応変に対処できる	0.918	-0.043	-0.027	-0.054	0.092
変化に対して機敏に対応できる	0.842	-0.054	-0.010	-0.011	0.114
上手くことが進まなかったら発想の転換をしようと思う	0.570	0.090	-0.035	0.085	-0.118
思い立ったらすぐ行動に移す	0.460	0.251	-0.052	0.106	0.032
活気に満ちている	-0.004	0.943	0.026	-0.008	0.008
エネルギーに満ちている	-0.031	0.883	0.024	-0.019	0.065
新しい朝を迎えるのが楽しみだ	0.128	0.544	0.129	-0.022	0.012
失敗しても何度でも挑戦し続けられる	0.024	0.050	0.806	-0.044	-0.086
成し遂げるまで粘り強く頑張る	0.092	0.132	0.757	0.017	-0.182
困難なことがあったら途中であきらめる (逆転)	-0.255	-0.009	0.595	0.063	0.361
その気になればなんでもできる	-0.068	-0.062	0.064	0.855	0.036
少しの助けがあれば何でもやっていけそうな気がする	0.014	0.082	-0.084	0.739	-0.011
たいていのことはなんとかなるものだ	0.240	-0.097	0.048	0.502	-0.055
予想外の事態が発生するとおろおろしてしまう (逆転)	0.086	-0.052	0.044	-0.036	0.770
思い通りに事が進まないで混乱して動けなくなる (逆転)	0.160	-0.054	0.141	0.001	0.661
嫌なことはなかなか忘れられない (逆転)	-0.088	0.263	-0.236	0.033	0.498

8. 分析 バイタリティーの因子 福井,清水(2015)をもとに作成

<p>元気さ <u>$\alpha = 0.867$</u> 平均値=3.028 標準偏差 =1.093 活気に満ち ている</p>	<p>前向きさ <u>$\alpha = 0.758$</u> 平均値=3.714 標準偏差 =0.816 その気にな ればなんでもできる</p>	<p>粘り強さ <u>$\alpha = 0.759$</u> 平均値=3.581 標準偏差 =0.805 失敗しても 何度でも挑 戦し続けら れる</p>	<p>平静さ <u>$\alpha = 0.744$</u> 平均値=3.651 標準偏差 =0.777 予想外の事 態が発生す るとオロオ ロしてしま う (逆転)</p>	<p>適応性 <u>$\alpha = 0.811$</u> 平均値=3.821 標準偏差 =0.749 あらゆる状 況に臨機応 変に対処で きる</p>
--	---	--	---	---

クロンバックの α …信頼性を表す1以下の係数のこと。
 α の値が0.6を超えるとよい値。

8. 分析 バイタリティーの因子

因子が分かれた理由

柔軟性

→ 適応性と平静さ

▶ 新たな変化、状況に対応することと物事を冷静に受け止めることは違うこととして認識されている。



8. 分析 時間展望の因子

バリマックス回転

質問項目	因子				
	過去否定	リスク	未来	衝動	過去肯定
昔のながい思い出を忘れることが出来ない	.867	-.020	.014	.060	.187
かつて自分の身に降りかかった悪い出来事について考えることがある	.758	-.016	.010	.257	.103
過去に犯したあやまちを後悔している	.734	.072	-.009	.031	-.004
これまでの人生で、しておけばよかったことについて色々と考える	.503	.140	-.045	.024	-.132
危険を冒すからこそ退屈せずに済む	.025	.673	.104	.087	.027
刺激的な経験をするために危ない橋を渡ることもある	-.049	.671	.178	.296	.000
一時の興奮に流されてしまうことがある	.160	.567	-.173	.267	.068
近しい友人ならばうるさいくらいがいい	.048	.467	.011	-.011	.105
今日の稼ぎは、明日のためにとっておくより、今の楽しみに使うほうがいい	.078	.400	-.255	.067	.074
コツコツと努力し、時間通りに成し遂げる	.024	.125	.721	-.068	.189
しなければならぬことがある時、誘惑に打ち勝つことが出来る	-.108	-.047	.637	-.092	.047
今夜遊びに行くよりも、明日の締め切りや、やるべきことを優先する	.017	-.442	.571	-.019	.057
自分の成長のためなら、困難で面白味のないことも続ける	.051	.301	.510	-.053	.042
友人との約束や、期限をきちんとする	.008	-.084	.406	.092	.108
思い付きで決断することがある	.197	.232	-.033	.896	.025
衝動的に行動することがある	.123	.193	-.066	.773	.145
昔のことを考えるのは楽しい	.037	.128	.204	.097	.856
昔の懐かしいことに触れると、素晴らしい思い出がよみがえってくる	.038	.129	.193	.077	.831

8. 分析 時間展望の因子 高橋(2016)をもとに作成

衝動型

$\alpha=0.865$

平均値=3.778/標準偏差=0.997

思いつきで決断する
ことがある

過去否定型

$\alpha=0.807$

平均値=3.521/標準偏差=1.011

昔の苦い思い出を忘れる事
ができない

リスク選好型

$\alpha=0.703$ 平均値=3.191

標準偏差=0.819

危険を冒すからこそ
退屈せずに済む

未来型

$\alpha=0.692$ 平均値=0.794

標準偏差=0.794

コツコツと努力し時
間通りに成し遂げる

過去肯定型

$\alpha=0.874$ 平均値3.454

標準偏差=1.140

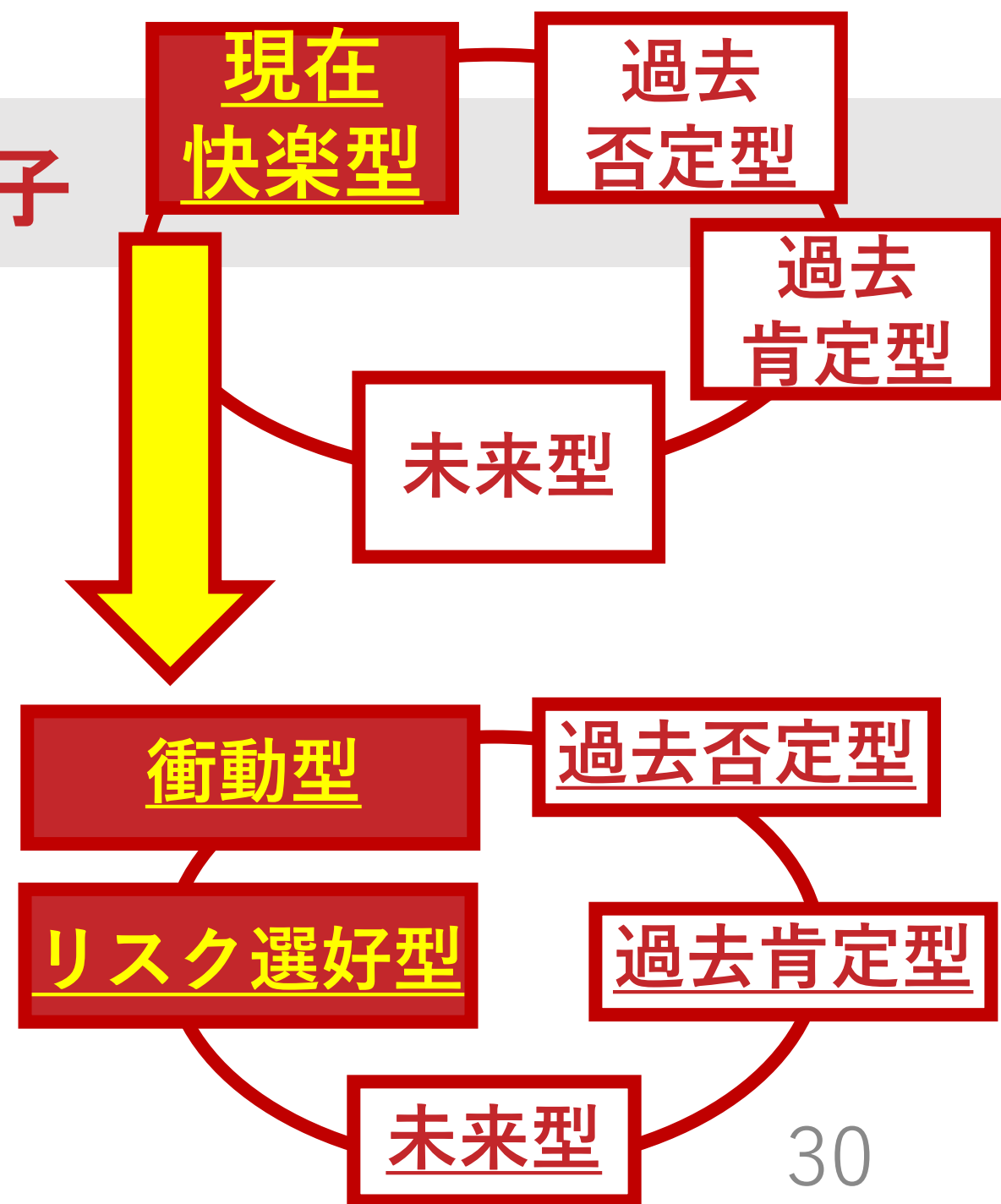
昔のことを考えるのは
楽しい

8. 分析 時間展望の因子

因子が分かれた理由

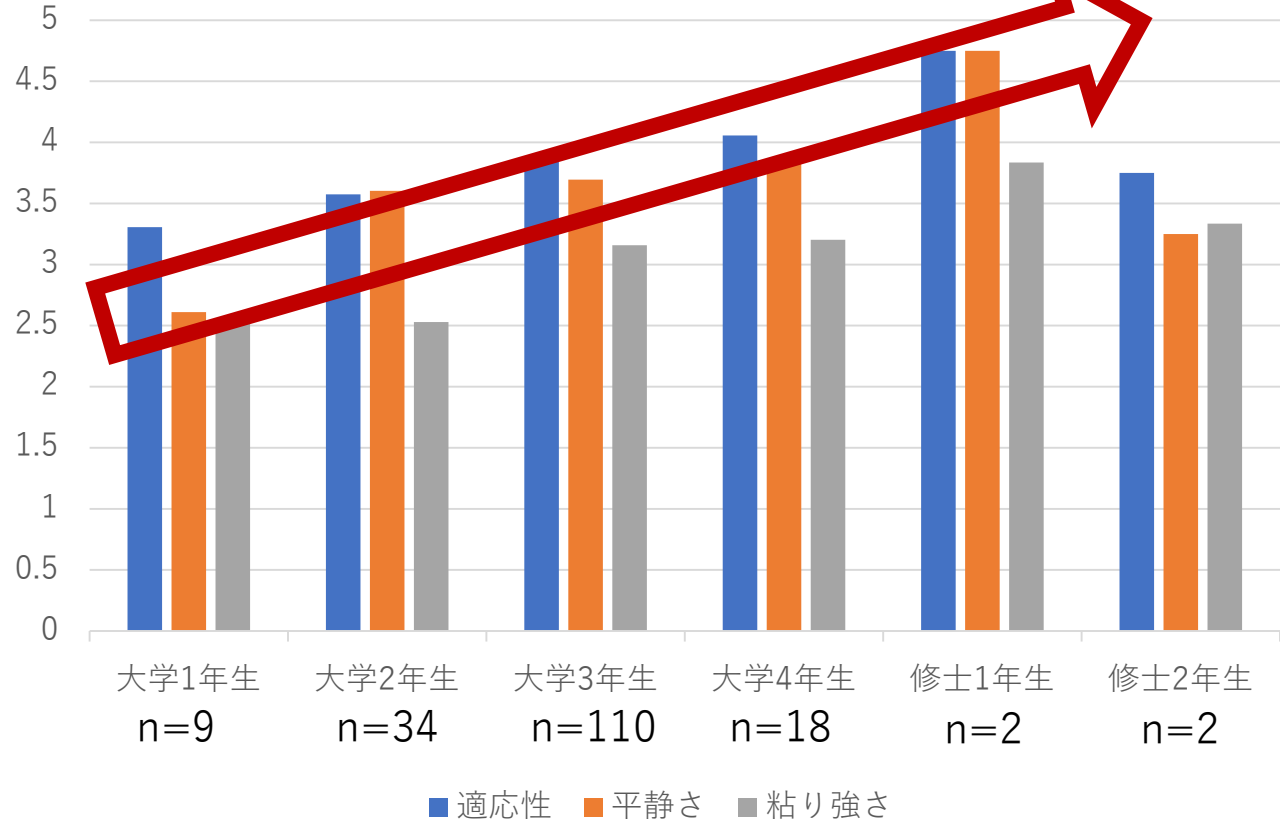
現在快樂
→衝動型とリスク選好

▶ 考える前に行動すること
と、リスクテイキングすること
は違うこととして認識
されている。

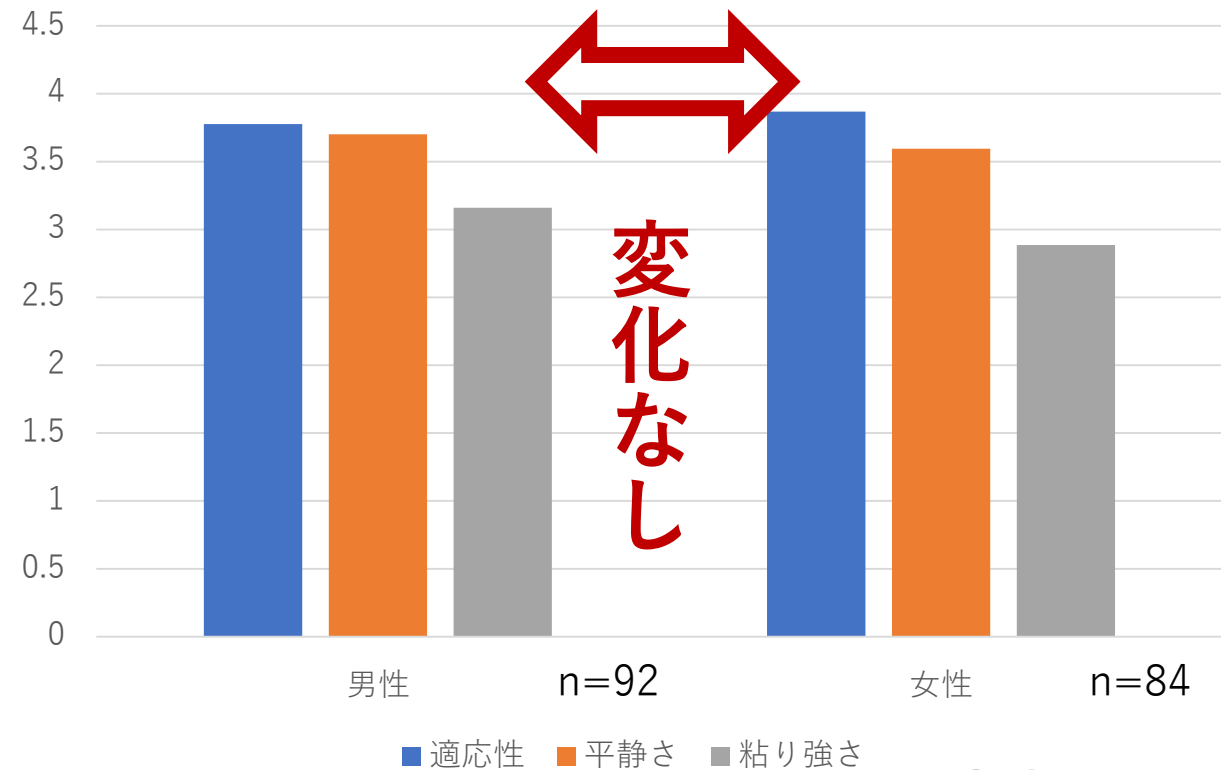


8. 分析 バイタリティーの平均スコア

学年ごとのバイタリティー各項目の平均スコア

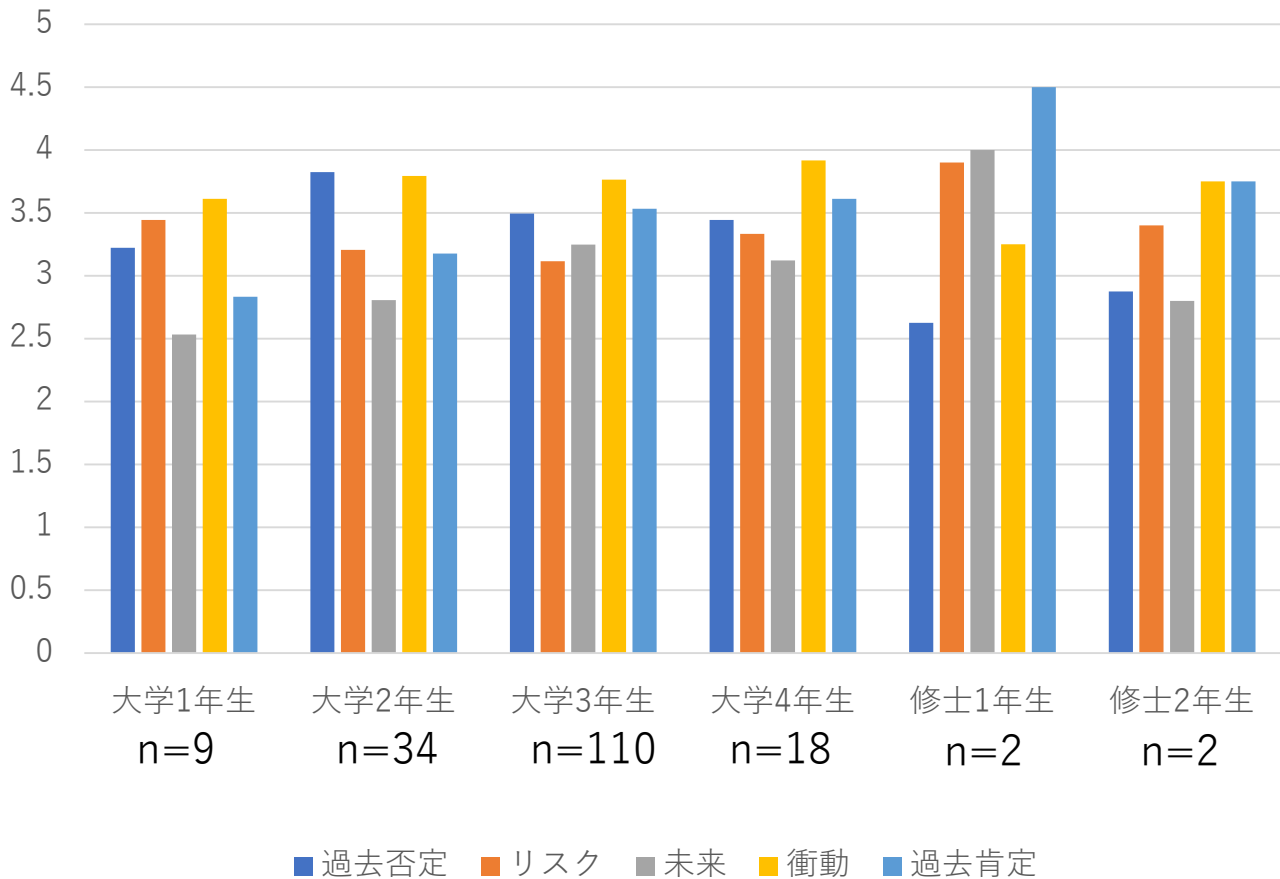


男女別のバイタリティー各項目の平均スコア

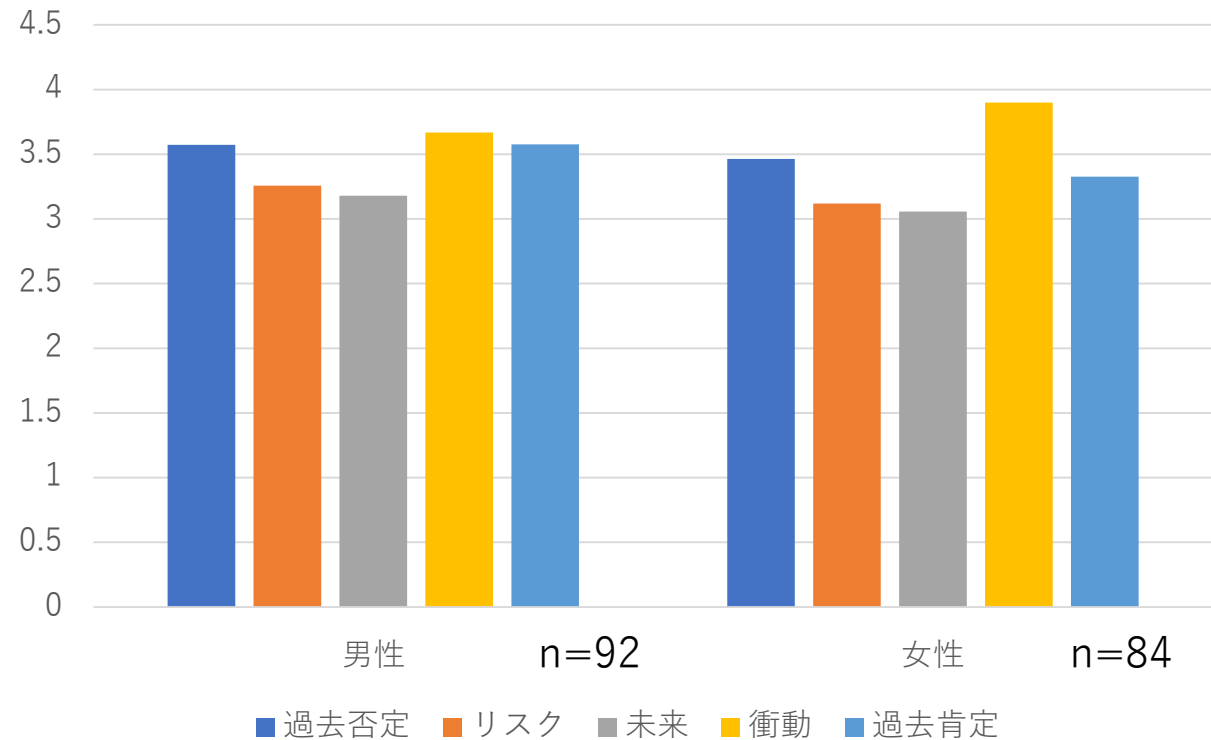


8. 分析 時間展望の平均スコア

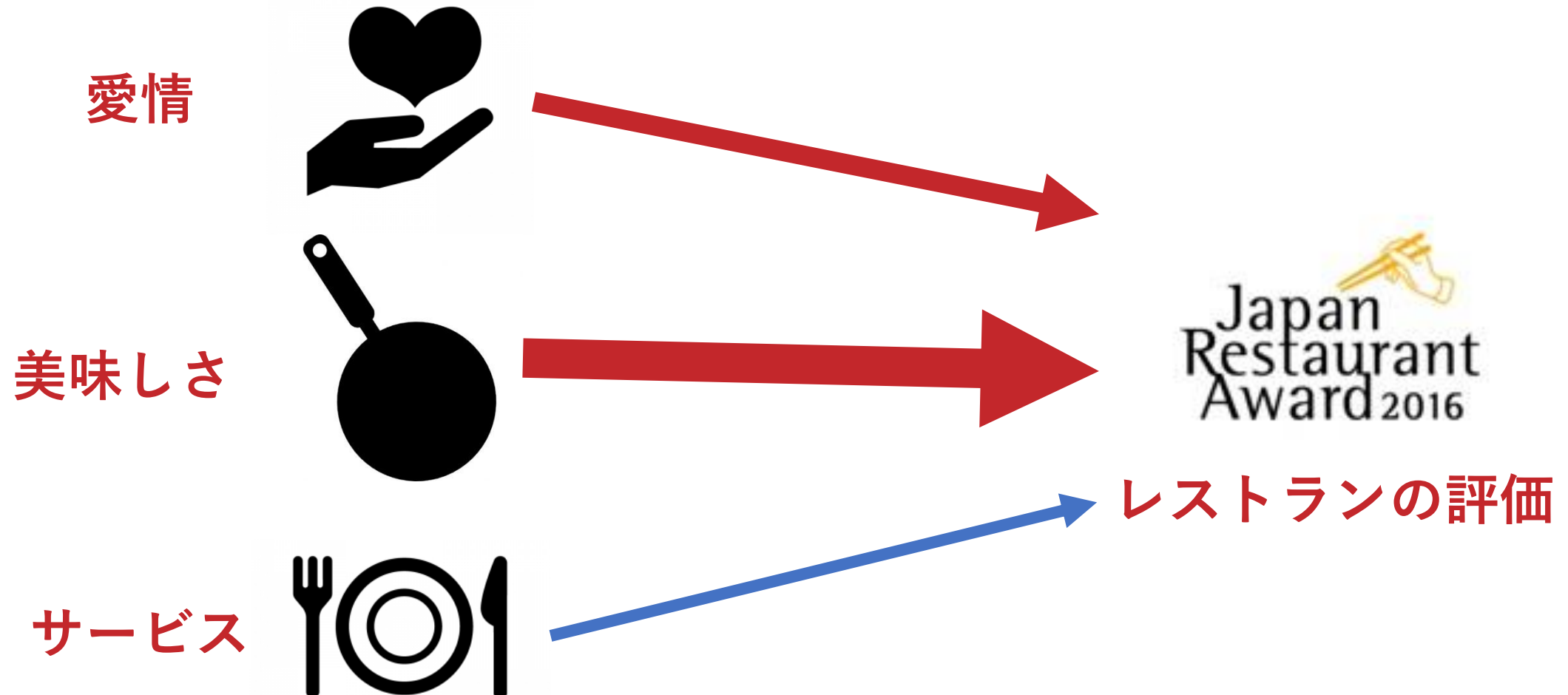
学年ごとの時間展望各項目の平均スコア



男女別の時間展望各項目の平均スコア

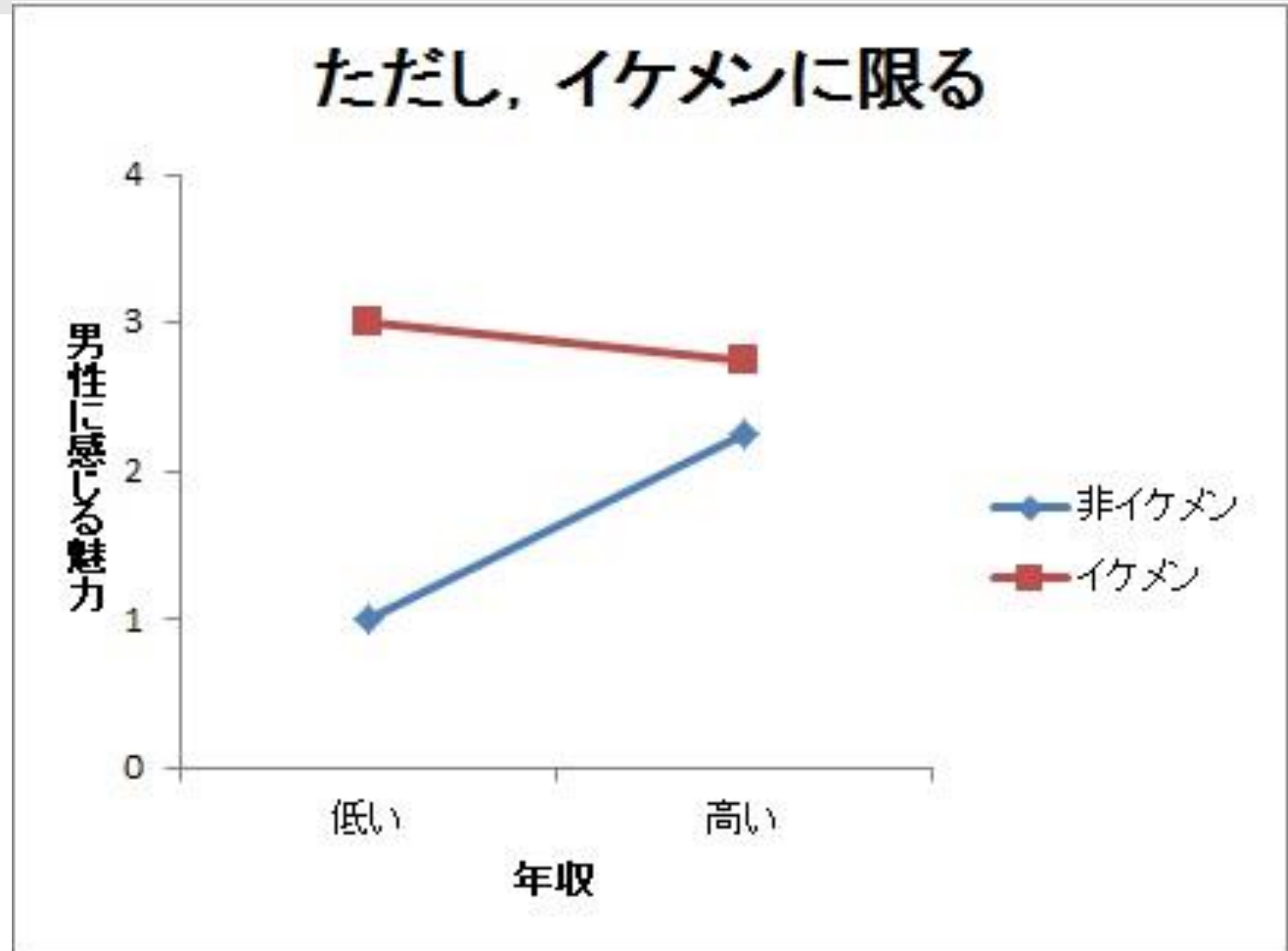


8. 分析 重回帰分析とは



8. 分析 交互作用効果とは

交互作用効果



※あくまでも例です。

8. 分析 仮説の検証

仮説 1

H1-1：リーダー経験が、
柔軟性
→ 適応性・平静さに正の影響を与える

H1-2：海外生活経験が、
柔軟性
→ 適応性・平静さに正の影響を与える

8. 分析 仮説の検証

仮説 1

H1-1 →

H1-2 →

変数	仮説1-1,1-2			
	適応性		平静さ	
	ベータ	標準誤差	ベータ	標準誤差
性別ダミー(男性=1,女性=0)	-0.050	-0.075	0.079	0.117
学年	0.180**	0.158	0.238***	0.069
経営・経済・商学部	-0.003	-0.005	-0.024	0.121
経験の期間	-0.040	-0.011	-0.027	0.022
リーダー経験	0.053	0.110	0.206**	0.215
立ち上げ経験	0.124	0.342	0.353***	0.262
海外経験	0.134	0.269	0.126	0.205
挫折経験	0.003	0.006	0.222**	0.196
感化経験	0.142	0.241	0.233**	0.187
時間展望				
過去否定型	0.024	0.017	-0.081	0.061
現在快樂(リスク)型	0.094	0.086	-0.135	0.078
未来型	0.188**	0.177	0.025	0.077
現在快樂(衝動)型	0.176**	0.132	0.118	0.067
過去肯定型	-0.018	-0.012	-0.022	0.054
定数	1.978		2.896	
調整済み決定係数	0.080		0.114	
F値	2.089**		2.601***	

適応性 → 棄却
 平静さ → 支持

適応性 → 棄却
 平静さ → 棄却

*** 1%水準で有意
 ** 5%水準で有意
 * 10%水準で有意

8. 分析 仮説の検証

仮説 1

H1-1：リーダー経験が、

適応性に正の影響を与える → 棄却

平静さに正の影響を与える → 支持

H1-2：海外経験が、

適応性・平静さに正の影響を与える → 棄却

8. 分析 仮説の考察

仮説 1

柔軟性

適応性

経験単体では影響がない。
物事への対処、対応を測る適応性は
人の考え方が大きく影響するため、
時間展望との組み合わせで初めて影響が出る。

柔軟性

平静さ

経験単体で影響がある。
物事を冷静に受けとめることができるか
を測るものであるため、
経験が単体で影響することもある。

8. 分析 仮説の検証

仮説 2

H2-1：過去否定型は、
柔軟性
→ 適応性・平静さに負の影響を与える。

H2-2：未来型は、粘り強さに正の影響を与える。

8. 分析 仮説の検証

仮説 2

変数	適応性		平静さ		粘り強さ		
	ベータ	標準誤差	ベータ	標準誤差	ベータ	標準誤差	
性別ダミー(男性=1,女性=0)	-0.050	-0.075	0.079	0.117	0.033	0.110	
学年	0.180**	0.158	0.238***	0.069	-0.097	0.064	
経営・経済・商学部	-0.003	-0.005	-0.024	0.121	-0.124*	0.113	
経験の期間	-0.040	-0.011	-0.027	0.022	0.061	0.020	
経験	リーダー経験	0.053	0.110	0.206**	0.215	0.101	0.201
	立ち上げ経験	0.124	0.342	0.353***	0.262	0.114	0.245
	海外経験	0.134	0.269	0.126	0.205	0.175**	0.192
	挫折経験	0.003	0.006	0.222**	0.196	0.188**	0.183
	感化経験	0.142	0.241	0.233**	0.187	0.164*	0.175
時間展望	過去否定型	0.024	0.017	-0.081	0.061	-0.028	0.057
	現在快樂(リスク)型	0.094	0.086	-0.135	0.078	0.226***	0.073
	未来型	0.188**	0.177	0.025	0.077	0.393***	0.072
	現在快樂(衝動)型	0.176**	0.132	0.118	0.067	-0.143*	0.063
過去肯定型	-0.018	-0.012	-0.022	0.054	0.19***	0.050	
定数	1.978		2.896		1.589		
調整済み決定係数	0.080		0.114		0.278		
F値	2.089**		2.601***		5.813***		

*** 1%水準で有意
** 5%水準で有意
* 10%水準で有意

H2-1 →

➡ 棄却

H2-2 →

➡ 支持

8. 分析 仮説の検証

仮説 2

H2-1：過去否定型は、
適応性・平静さに負の影響を与える。

→ 棄却

H2-2：未来型は、粘り強さに正の影響を与える。

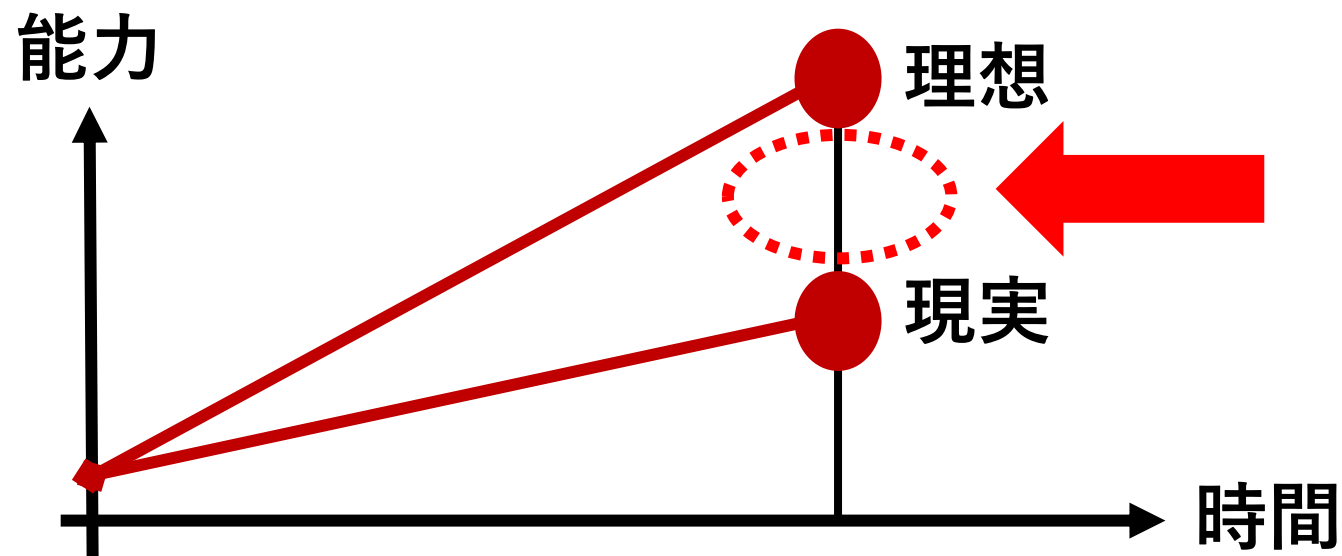
→ 支持

8. 分析 仮説の考察

仮説2の考察

過去否定型

過去に起こった嫌なことを考えたり、今まで機会を逃してきたこと、すべきだったことについて考えることがよくある (Zimbardo & Boyd, 1999) ため、過去の失敗を割り切れず、自分の能力の伸びた部分よりも、伸ばせなかった部分に焦点を当てがちで、実際に伸びた部分の評価が分散する傾向にあると考えられる。



今回の質問票は主観的な回答のため、バイタリティーへの影響は見られなかった

8. 分析 仮説の考察

仮説 3

H3-1：過去否定型が海外経験をすると、
柔軟性
→ 適応性・平静さに正の影響を与える。

8. 分析 仮説の検証

仮説 3

	変数	適応性		平静さ	
		ベータ	標準誤差	ベータ	標準誤差
	性別ダミー	-0.052	0.116	0.081	0.117
	学年	0.179**	0.068	0.240***	0.069
	経営・経済・商学部	-0.006	0.120	-0.017	0.121
	経験の期間	-0.038	0.021	-0.03	0.022
経験	リーダー経験	0.051	0.211	0.212**	0.214
	立ち上げ経験	0.116	0.260	0.369***	0.264
	海外経験	0.146	0.206	0.098	0.209
	挫折経験	0.003	0.193	0.221**	0.195
	感化経験	0.139	0.184	0.239**	0.187
時間展望	過去否定型	0.027	0.060	-0.088	0.061
	現在快樂(リスク)型	0.090	0.077	-0.128	0.078
	未来型	0.191**	0.076	0.019	0.077
	現在快樂(衝動)型	0.174**	0.066	0.123	0.067
	過去肯定型	-0.011	0.053	-0.036	0.054
H3-1 →	海外経験 × 過去否定型	0.050	0.171	-0.110	0.173
	定数	1.970		2.913	
	調整済み決定係数	0.077		0.119	
	F値	1.970**		2.579***	

*** 1%水準で有意
 ** 5%水準で有意
 * 10%水準で有意

 **棄却**

8. 分析 仮説の検証

仮説 3

H3-1：過去否定型が海外経験をすると、
適応性・平静さに正の影響を与える。

→ 棄却

8. 分析 仮説の考察



仮説 3

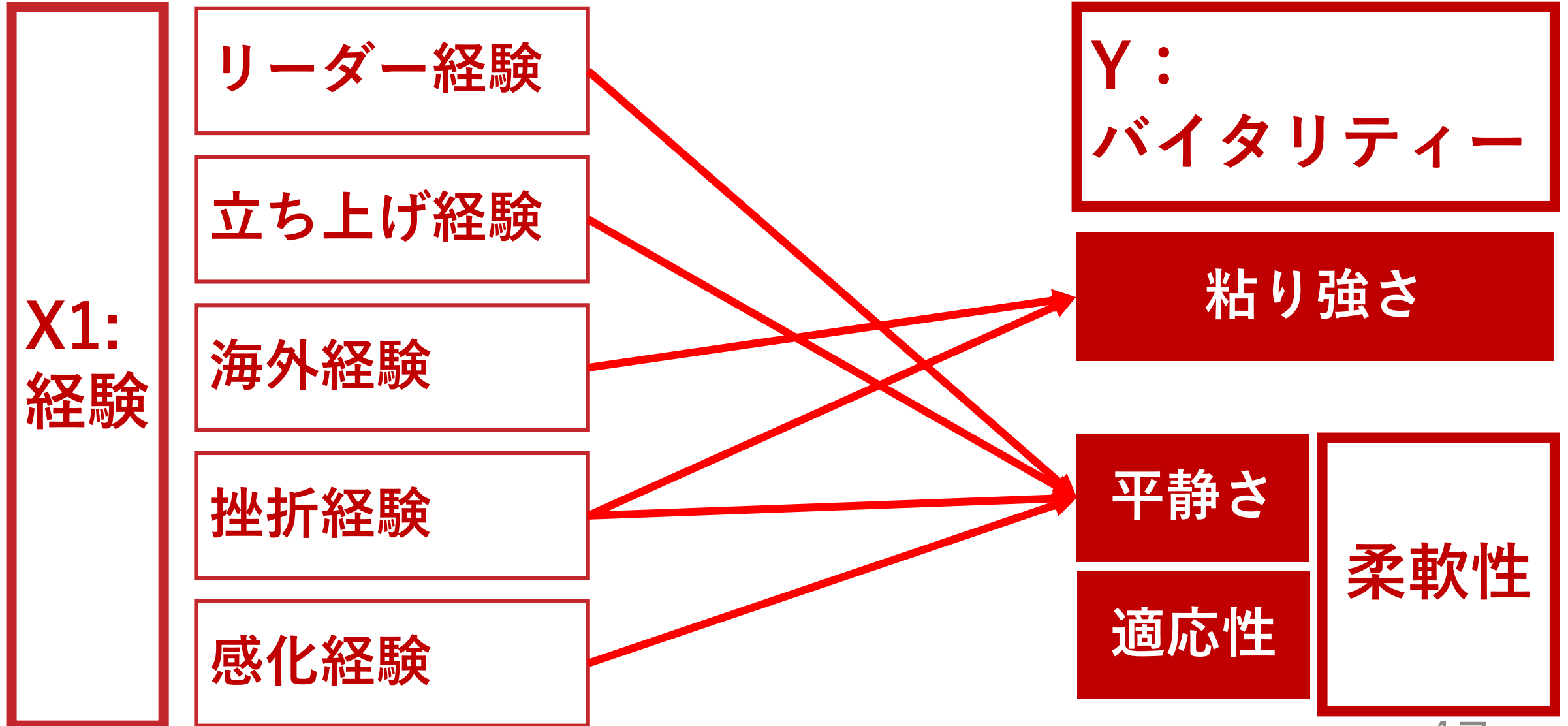
過去否定型は、過度に保守的で、変化や新しい経験にオープンではなく、現状を第一に考える傾向にある。

(高橋, 2016)

その性質が強いため、海外経験をして、経験をすること自体から得られる適応性・平静さを強めることはない。

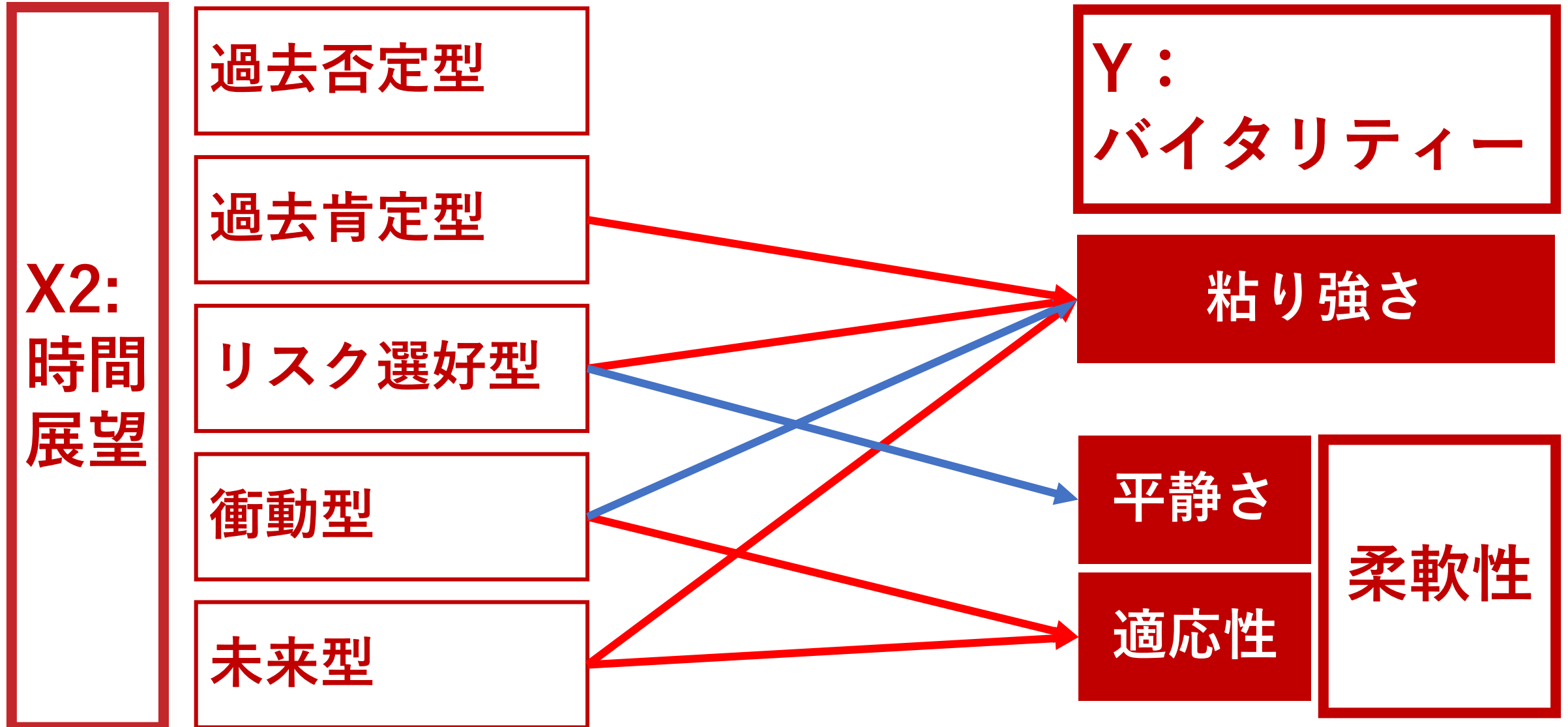
8. 分析 まとめ

正の影響 
負の影響 



8. 分析 まとめ

正の影響 →
負の影響 →



8. 分析 追加分析

文部科学省(2014)

「若者の海外留学を取り巻く現状について」

日本人の海外留学者数の推移



- 海外留学者数は、日本を除き増加傾向。
- 海外留学する日本人学生数は、2004年がピーク。

= 日本人留学生数は減っている!!

→ 留学生の経済的負担を軽減するための寄附促進、給付を含む官民が協力した新たな仕組みを創設。

= 留学生数増加に取り組む時代の流れ!!

はたして海外経験は重要なのか??

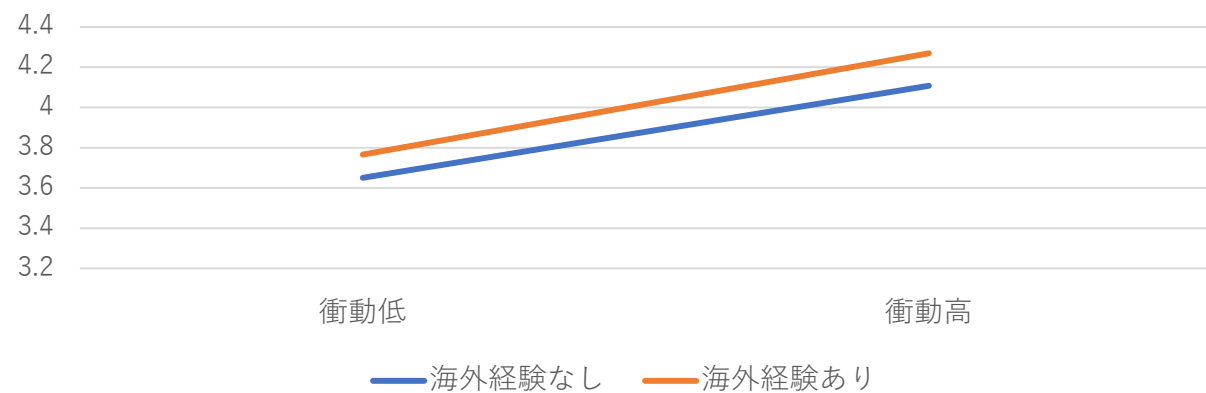
8. 分析 追加分析

	変数	適応性		粘り強さ		粘り強さ		粘り強さ	
		ベータ	標準誤差	ベータ	標準誤差	ベータ	標準誤差	ベータ	標準誤差
	性別ダミー	-0.049	0.114	0.034	0.109	0.030	0.109	0.034	0.108
	学年	0.186**	0.067	-0.092	0.064	-0.100	0.064	-0.094	0.064
	経営・経済・商学部	-0.019	0.119	-0.139**	0.113	-0.133**	0.113	-0.134**	0.112
	経験の期間	-0.047	0.021	0.054	0.020	0.064	0.020	0.067	0.020
経験	リーダー経験	0.048	0.209	0.096	0.199	0.093	0.199	0.115	0.199
	立ち上げ経験	0.102	0.257	0.094	0.245	0.093	0.245	0.115	0.242
	海外経験	0.095	0.204	0.140	0.194	0.208**	0.194	0.210**	0.192
	挫折経験	0.004	0.191	0.189**	0.181	0.189**	0.181	0.200**	0.181
	感化経験	0.130	0.183	0.154	0.174	0.157	0.174	0.178*	0.173
時間展望	過去否定型	0.016	0.059	-0.035	0.056	-0.019	0.056	-0.042	0.056
	現在快樂(リスク)型	0.111	0.076	0.242***	0.073	0.218***	0.072	0.212***	0.072
	未来型	0.199**	0.075	0.403***	0.071	0.400***	0.071	0.391***	0.071
	現在快樂(衝動)型	0.176**	0.065	-0.143*	0.062	-0.149*	0.062	-0.120	0.062
	過去肯定型	-0.018	0.052	0.191***	0.050	0.208***	0.050	0.206***	0.050
	海外経験×衝動型	0.148*	0.164	0.133**	0.156				
	海外経験×過去否定型					0.133*	0.161		
	海外経験×リスク型							0.175**	0.151
	定数	1.929		1.542		1.567		1.542	
	調整済み決定係数	0.096		0.291		0.290		0.296	
	F値	2.239***		5.788***		5.764***		5.908***	

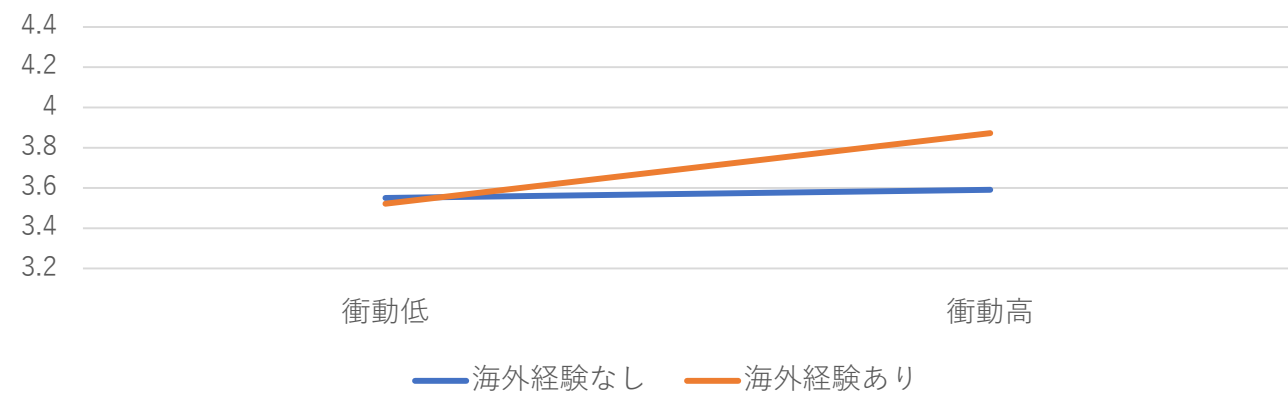
*** 1%水準で有意
 ** 5%水準で有意
 * 10%水準で有意

8. 分析 追加分析

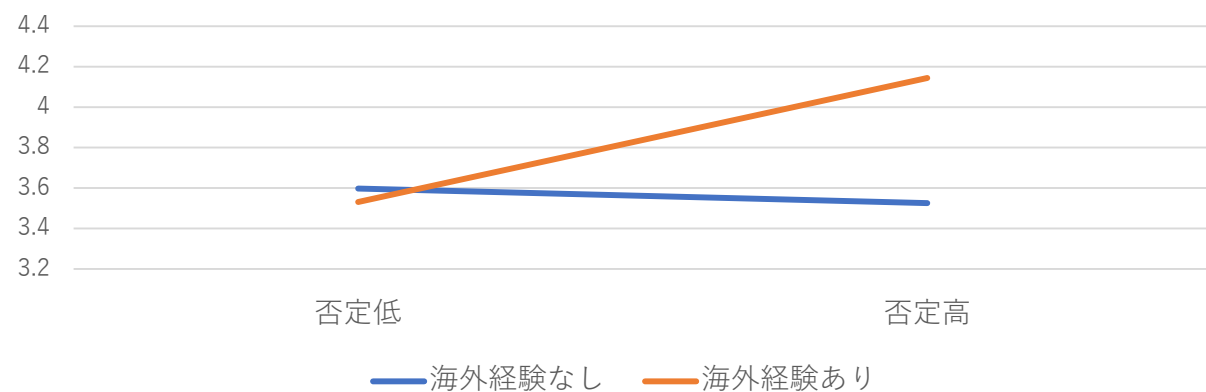
適応性



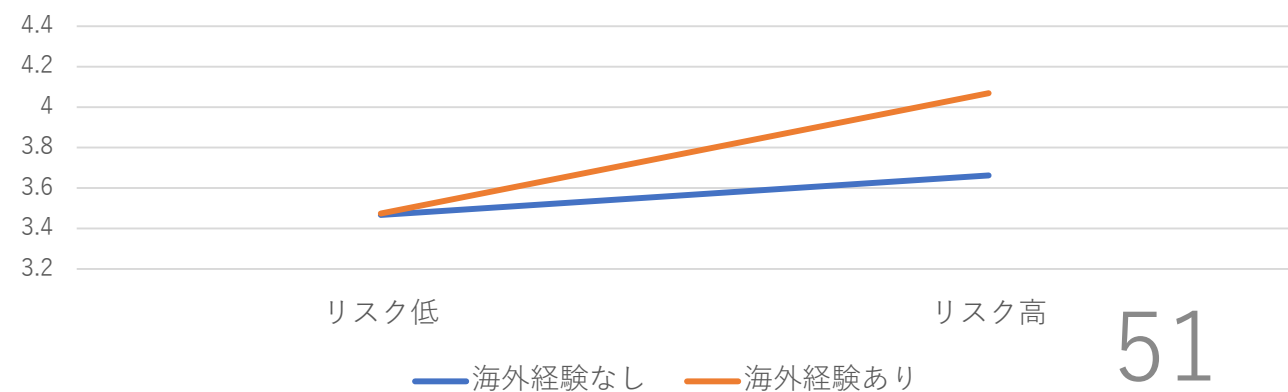
粘り強さ



粘り強さ



粘り強さ



8. 分析 仮説の検証

追加研究

海外経験は時間展望のタイプにより効果が分かれる

- 新しい未知の分野や世界に自ら飛び出し、自国に身を置かないことによる不便さを体験し、そこから学べることの大きさを実感する
- 自国の慣習や常識にとらわれず、異なった価値観や概念の中でもまれることで、異文化理解力や対応力が向上するだけでなく、自己の確立にも役立つ(太田, 2011)
 - 海外経験×衝動型→適応性、粘り強さ
 - 海外経験×リスク選好型→粘り強さ
 - 海外経験×過去否定型→粘り強さ

9. インプリケーション

1. 学術的インプリケーション

- バイタリティーの先行要因として経験や時間展望があることが明らかになった
- 大学生の時間展望は、現在快楽型が独自の分かれ方をすることがわかった

9. インプリケーション

2. 実務的インプリケーション

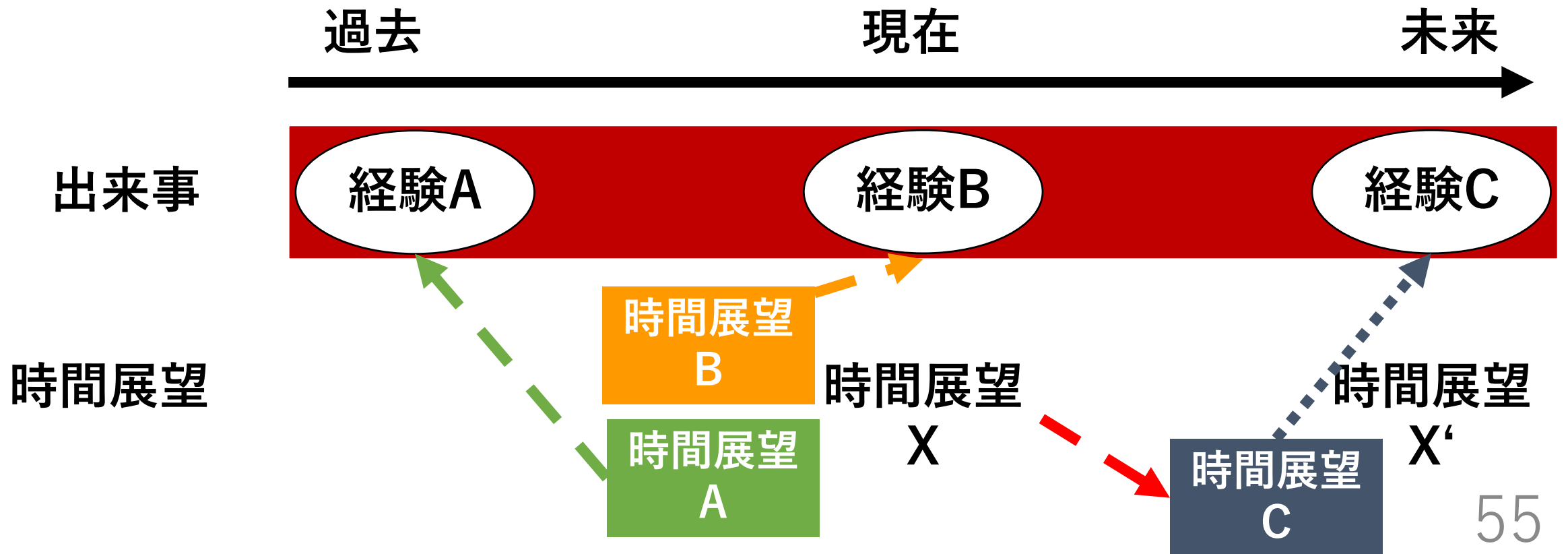
➤ 経験を振り返るときに、取り入れるとバイタリティが得られる時間展望がわかった。

• 時間展望を取り入れるとはどういうことか？

→ 時間展望はある時点における時間に対する認識であり、考え方に近い。更に完全にタイプ分けしているものではなくあくまで傾向の話である。したがってその時間展望を持っている友人に相談したりして、自ら進んで客観的にその視点を取り入れることができる。

9. インプリケーション

2. 実務的インプリケーション



9. インプリケーション

2.

実務的インプリケーション

具体的には・・・

➤ **海外経験**(粘り強さ+)

衝動型の考え方を取り入れると→適応性、粘り強さ

いろいろな考え方

×

さまざまな経験

＝

未来のあなた

9. 参考文献

Kolb, D.A. (1984). *Experiential Learning: Experience as The Source of Learning and Development*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall

Morgan, W. McCall, Jr. (1998). *High Flyers: Developing the Next Generation of Leaders*, Harvard Business School Pr.

Phillip, G. Zimbardo., & John, N. Boyd. (1999). "Putting Time in Perspective: A Valid, Reliable Individual- Differences Metric". *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.77, No.6, pp.1271-1288.

天川 勝志(2015)「大学生に、求められる就業基礎力に関する考察—産業構造の変化に伴う人材採用・育成戦略と関連して—」『成蹊大学一般研究報告』 Vol.49, No.3, pp.1-16.

池田 浩・古川 久敬 (2005)「リーダーの自信に関する研究—自信測定尺度の開発およびマネジメント志向性との関連性—」『実験社会心理学研究』 Vol.44, No.2, pp.145-156.

犬塚 正智(2004)「リーダーシップ能力と人間主義マネジメント」『創価経営論集』 Vol.29, No.1/2, pp.15-40.

太田 浩(2011)「なぜ海外留学離れは起こっているのか」『教育と医学』 Vol.59, No.1, pp.68-76.

金井 壽宏・古野 庸一(2001)「「一皮むける経験」とリーダーシップ開発：知的競争力の源泉としてのミドルの育成」『一橋ビジネスレビュー』 Vol.49, No.1, pp.48-67.

金井 壽宏(2002)『仕事で「一皮むける」～関連経連「一皮むけた経験」に学ぶ～』 光文社

金井 壽宏・尾形 真実哉(2008)「組織行動論(organizational behavior: OB)への時間展望概念導入の試み—「希望の心理学」適用のための理論的考察と予備的実証分析—」『神戸大学経営学研究科

Discussionpaper』 Vol.30.

9. 参考文献

- 楠見 孝(1999)「中間管理職のスキル,知識とその学習」『日本労働研究雑誌』No.474, pp.39-49.
- 公益社団法人経済同友会(2015)「これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待～個人の資質能力を高め、組織を活かした競争力の向上～」pp.1-34.
- 経済産業省(2010)「大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査」『平成21年度就職支援体制調査事業』
- 小林 文生(2013)「短期海外研修による教育的効果の再検討：学生の報告書の多面的な分析を通して」『一橋大学機関リポジトリ』No.7, pp.162-185.
- 清水裕士(2014)「重回帰分析で交互作用を検討する」
URL:<http://norimune.net/1733>, アクセス日2017年11月22日.
- 高橋 潔(2016)「仕事の時間軸」『国民経済雑誌』Vol.213, No.6, pp.29-40.
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構(2013)「『構造変化の中での企業経営と人材のあり方に関する調査』結果」pp.1-17.
- 福井 未来・三保 紀裕・青木 貴寛・清水 和秋(2015a)「バイタリティーの次元性－信頼性と妥当性－」『関西大学心理学研究』No.6, pp.1-11.
- 福井 未来・清水 和秋(2015b)「バイタリティー尺度作成の試み－大学生と成人を調査対象として」『パーソナリティ研究』Vol.24, No.2, pp.147-150.
- 松尾 睦(2011)「公務員の経験学習と人材育成」『国民経済雑誌』Vol.204, No.5, pp.31-41.
- 松尾 睦・岡本 玲子・塩見 美抄・鳩野 洋子・岩本 里織(2013)「保健師の経験学習プロセス」『国民経済雑誌』Vol.208, No.4, pp.1-13.



Thank you for listening !!